九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『失われた時を求めて』におけるステルマリアのイメージ : ステルマリア嬢からステルマリア夫人へ

松原, 陽子
明治大学商学部 : 教授

https://doi.org/10.15017/4355448

出版情報：Stella. 39, pp.37-48, 2020-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

『失われた時を求めて』における ステルマリアのイメージ

――ステルマリア嬢からステルマリア夫人へ――

松　原　陽　子

『花咲く乙女たちのかげに』において，バルベックのホテルで「私」が見かけたステルマリア嬢は，のちに『ゲルマントのほう』でステルマリア夫人となって現れ，「私」の夢想の対象となる［II, 40/678］[1)]。この登場人物は，「私」の想像のなかでブルターニュの海岸の風景と結びつけられる［II, 680-681］。本論では，『失われた時を求めて』において，彼女の描写に見られる色彩とイメージが小説の主題といかなる関係を持っているのか分析したい。彼女は，最終稿よりも草稿の段階において，より主要な役割を果たす登場人物であることが指摘されている[2)]。草稿においてコデラン嬢，カンペルレ嬢，ペノエ嬢，シラリア嬢といった名前で現れた娘たちは，最終稿ではステルマリア嬢，そしてステルマリア夫人として描かれる。そこで先ずは，彼女の前身となる女性たちをめぐる草稿の描写から最終稿のそれへの変遷を辿ってみよう。

ステルマリア嬢をめぐるイメージと色彩

『花咲く乙女たちのかげに』において，バルベックにあるグランドホテルの食堂で「私」は初めてステルマリア嬢を見かける。支配人から「私」と祖母が通された席は，ステルマリア氏とその娘が予約していた席で，ホテル側が予想していたよりも早く彼らが戻ってきたため，「私」と祖母は席を移動させられる［II, 39-40］。「私」はステルマリア嬢がレストランに入ってくるや，彼女のほとんど青みがかったと言ってよいほどの蒼白く美しい顔，すらりと伸びた身体とその所作に目を止める［II, 44］。彼女はブルターニュ地方の旧家出の田舎貴族で，「私」は彼女の姿からブルターニュの海岸を思い浮かべている［II, 40］。

草稿においても，ステルマリア嬢の前身と考えられているカンペルレ嬢と父

親は，ホテルで「私」と祖母が食事をしているテーブルのすぐ傍の席に通される。この場面でも，「私」の目につくのは，彼女のほとんど青みがかった蒼白い顔である［II, 907］。

また草稿の別の箇所でも，「私」はホテルでの食事中，ステルマリア嬢の原型と考えられる娘，コデラン嬢を見かける。彼女は少し離れたテーブルに着き，父親のコデラン侯爵と夕食をとっている――

> 私たちのテーブルからは少し遠いテーブルで，白髪のまじった男性，コデラン侯爵が娘と夕食をとっていた。彼女の鷲鼻としなやかな身体の輪郭，その瞳の尊大で冷たいところは，その人格によってもたらされたものというよりも，その種族と教育によって彼女のなかにもたらされたものであるように思われた。そうした特徴は彼女を人々のなかで隔てられた異なる存在にさえしていた。［II, 906-907］

ここで「鷲鼻」と「しなやかな身体」はコデラン嬢の特徴となっている。すでに指摘があるように[3]，「鷲鼻」はゲルマント家の人々の特徴であり，くわえて「鷲鼻」と「しなやかな身体」はフロベールの『ブルターニュ紀行』に登場する青年たちの身体的特徴でもある。この場面でコデラン嬢は「ブルターニュのゲルマント」の家系とされ［II, 907］，さらにカイエ 36 では「ヘビのような」身体つきをしていると推定されており[4]，この表現は当然のことにゲルマント公爵夫人を想わせよう[5]。『ゲルマントのほう』で公爵夫人の身震いは，フロベール『サランボー』における精霊のヘビの震えに喩えられていたからだ［II, 733］。ところが最終稿では，ステルマリア嬢の「すらりと伸びた身体」は描かれているものの［II, 44］，「鷲鼻」や「しなやかな身体」，「ヘビのような身体つき」は挙げられておらず，ゲルマント家系の特徴は消されている。

また先行研究が指摘するように[6]，ゲルマント家の特徴である「猫のような毛並み」［II, 730］を想わせる髪は，カンペルレ嬢の髪の「毛並み」を想わせる。しかしこの特徴も最終稿のステルマリア嬢の描写では消されている。その描写では「ヘビのような身体つき」「猫のような毛並み」といった動物の喩えは消されているのだ。こうした一連の変更はいかなる事情によるのか。ステルマリア嬢は何よりもブーローニュの森から連想されるブルターニュのイメージに強く結びつくことになるのがその理由だと思われる。

続いて，この人物をめぐり草稿で繰り返し描かれる装身具，灰色のフエルト

帽に注目してみよう。彼女は灰色のフェルト帽をかぶっており，そこからは羽根飾りが飛び出している――

> しかも彼女〔ステルマリア嬢〕は，食事のたびにいつも，少々時代遅れで，これ見よがしに飛び出した羽根飾りの付いた灰色のフエルト帽をかぶっており，その帽子のために私には彼女が優し気に見えた。それは，その帽子が彼女の銀色とバラ色の顔色と調和していたためではなく，彼女が貧しいと想像できて，私にとって彼女が身近に感じられたためであった。[II, 49]

この場面で灰色のフエルト帽はステルマリア嬢の銀色とバラ色の顔色と調和している。これをとらえて「私」は，彼女の貧しさを想像し，彼女を身近な存在に感じる。カイエ 36 では，彼女の前身となる人物，ペノエ嬢が初めて登場し，やはりいつも灰色のフエルト帽をかぶっている[7)]。カイエ 36 では，コデラン嬢は羽根飾りの付いた灰色のフエルト帽をかぶっている[8)]。カイエ 12 においても，カンペルレ嬢はいつも大きな羽根飾りの付いた灰色のフエルト帽をかぶっているのである[9)]。

羽根飾りはゲルマント公爵夫人の装身具としても登場しているので［II, 353］，ステルマリア嬢のそれと比べてみよう。彼女がフエルト帽に付けているのは「これ見よがしに飛び出した」[II, 49] 羽根飾りであるのに対して，オペラ座に観劇に訪れたゲルマント公爵夫人は「一本の簡素な羽根飾り」[II, 353] を髪に付けている。また，この場面で公爵夫人の服や手袋，羽根扇は白色で，白い鳥のイメージと結び付けられるのに対し，ステルマリア嬢は，羽根飾りの付いた灰色のフエルト帽を身につけているだけで，鳥のイメージと重ねられることはない。その身体の蒼白い輪郭には，ただ靄のかかったブルターニュの沿岸の雰囲気があたかも衣服のようにまとわりつくのである［II, 680］。

色彩に着目すると，ゲルマント家の人たちは時折り，紫色になるほど特別なバラ色の肌と輝かんばかりのブロンド色の繊細な髪をしている［II, 730］。ゲルマント家の人たちが「バラ色で黄金色の近寄りがたい種族」[IV, 554] ととらえられているのに対して，上述のようにステルマリア嬢は青みがかった蒼白い色，灰色と銀色，バラ色で形容されている。

彼女をめぐる描写において，特に蒼白い色や灰色が用いられているのはなぜだろうか。灰色のフェルト帽は，『ブルターニュ紀行』の青年たちが身に着ける

もののひとつであった[10)]。他方，ステルマリア嬢の故郷はブルターニュ地方であり，「私」の夢想のなかではブルターニュの海岸の風景と結びつけられる［II, 680］。プルーストが読んだと見なされる『ブルターニュ紀行』において[11)]，語り手はブロワの通りで，平穏な家屋に病的な情熱が秘められていることを夢想し，その住人として「長い爪のある細い手をした蒼白い美女」や「胸を病んで死にかかっている貴族の婦人」を思い描く[12)]。また，通りの両側には灰色の壁が広がり，小さな入口のある大きな庭を囲んでいるが，『楽しみと日々』の「ベグ＝メーユの半島」でも，日が差さない日々には灰色になる入り江が描かれている――

> 常に入り江は，枝道と反対側の海岸の森との間に鮮明に現れ，太陽が出ていない日々には，葉っぱの間のマコガレイのように灰色になる。[13)]

このように，ステルマリア嬢の描写がブルターニュのそれと同系統の色彩を帯びることで，人物と風景の結びつきが強調されているのだ。

この登場人物をめぐる色彩としては頬の色も注目に値する――

> 彼女の蒼白い頬に花のように広がる官能的で鮮やかなバラ色の色調は，ヴィヴォンヌ川の白い睡蓮の芯に鮮やかなバラ色を加える色調に似ている。そうした視線や頬の色調を見て，私は，彼女がブルターニュで送っている詩情あふれる生活の味をその身にまとって私に容易く味わわせてくれるだろうと感じていた。その生活は，習慣になりきっているためか，生まれながら高貴であるせいか，貧乏や吝嗇に対する嫌悪のせいか，彼女自身大した価値を認めていなかった生活のようであったが，それでも彼女がその身体のなかに封じ込めているものであった。［II, 49］

この場面で，ステルマリア嬢の蒼白き頬に現れる鮮やかなバラ色は，ヴィヴォンヌ川の白い睡蓮の芯を染めるバラ色に重ねられている。彼女の前身となる登場人物の頬の描写を草稿で確認してみよう。カイエ 36 においてコデラン嬢は，鉤鼻で髪はブロンド，そしてその蒼白い頬には，コンブレーの睡蓮の色と同じバラ色が見られる［II, 907］。同様にカイエ 12 では，カンペルレ嬢の白い，青みがかった頬の真ん中には，やはりヴィヴォンヌ川の白い睡蓮の芯を染めるバラ色に似た鮮やかなバラ色が浮かぶ［II, 909］[14)]。こうした場面では，ヴィヴォンヌ川のイメージがブルターニュの水のイメージに連なっているかのようである。バラ色は，サンザシのイメージによってジルベルトと結びつけられ［I, 137–

141]，次いで，アルベルチーヌが属する少女たちの一団もバラの花々に喩えられていたことを思い返そう[15]。ステルマリア嬢のバラ色の頬は，彼女がもともと海辺の少女たちの一団のひとりとして構想されていた痕跡ではあるまいか。

じじつ草稿では，ステルマリア嬢の前身と考えられる少女は，少女たちのグループのひとりとして登場する［IV, 666-668］。たとえばカイエ 36 では，「私」がフォルシュヴィル嬢にペノエ嬢のことを知っているか尋ねる場面がある。前者は後者について「良家の出であるが，あまり品が良くない身を落とした少女だ」と「私」に答える。さらに，その場でフォルシュヴィル嬢がセシルにペノエ嬢についての情報を求めると，セシルもまた，彼女のことを最も良い家の出ではあるが,「身持ちが悪い」と説明する。最終稿では『花咲く乙女たちのかげに』で，ジルベルトがアルベルチーヌについて，この「身持ちが悪い」という表現を使っている［I, 503］。一方，最終稿におけるステルマリア嬢の描写では，この表現こそ使われていないが,「私」には，彼女のまなざしの特徴には官能の快楽を求める嗜好が表れているように思える――

> しかし，すぐに乾くその瞳の奥底に一瞬，現れる視線のなかには，特に官能の快楽を好む嗜好によって，とても高慢な女性にもたらされる控えめと言っていいほどの優しさが感じられた。彼女〔ステルマリア嬢〕がほどなく認めることになる魅力はひとつだけで，それはだれであろうと彼女にそうした快楽を感じさせる人物が持っていると彼女には思える魅力で，それが喜劇役者であれ，曲芸師であれ，その人物のために，彼女はいつか夫を捨てるのかもしれない。［II, 49］

実際，のちに「私」はステルマリア夫人が若い男性と常軌を逸した恋愛結婚をしたことを知る［II, 687］。

カイエ 36 において語り手「私」は，ペノエ嬢を含む 4 人の少女たちとブーローニュの森にある島で待ち合わせする。彼女たちのなかに,「コンブレーの生垣の後ろで，バラ色の帽子をかぶっていた少女」と「サン＝ヴァレリーの食堂で，雉の羽根の付いた灰色のフエルト帽をかぶっていた少女」がいる[16]。このようにステルマリア嬢と同じ装身具「羽根の付いた灰色のフエルト帽」を身につけた少女は，草稿で少女たちの一団のひとりとして現れるのである。

さらにカイエ 26 では，ステルマリア嬢を連想させるブルターニュ地方の大貴族の娘が海辺の少女の一団のひとりとして現れる[17]。カイエ 26 の別の箇所で，少女のグループのひとりであるカンペルレ嬢は，最初「私」にとって，親しく

なればブルターニュ地方の城や物悲しい荒野，特殊な一族，礼拝堂，池の魅力などを教えてくれるだろうと想像していた，珍しい，ほかとは違う，近寄りがたい存在であったが，のちに自由におしゃべりできる仲間になる[18]。しかし最終稿では，ステルマリア嬢が少女の一団のひとりとして現れることはなく，「私」がおしゃべりできることもない。

ところで同じくカイエ 26［II, 904-905］では，ペノエ嬢の父親からオセアニアの魅力的な島へ発つように言われ，それに対して「私」は急いで，ペノエ嬢に二度と会えなくなると答える[19]。また別の箇所では，同嬢の父からアメリカ南部に発つように言われ，「私」はそうすると彼女に会えなくなると考え，胸を締め付けられるように感じる[20]。この記述のあとに，愛する対象と別れる苦しみが習慣により和らげられ，苦しむ自我が消滅していく過程についての考察が続く。これは，ジルベルトやアルベルチーヌと別れるときに「私」が感じる苦悩や，そのあとに訪れる忘却についての考察につながるものと思われる。

ステルマリア夫人をめぐるイメージと色彩

のちに「私」はステルマリア夫人とブーローニュの森で会うことを夢見る［II, 678］。ステルマリア嬢は結婚・離婚のあと，『ゲルマントのほう』においてステルマリア夫人として登場するが，「私」はサン＝ルーに促され，会う約束をとりつけようと，秋のある日曜に彼女に手紙を届けさせる。同日の天気の描写を見てみよう――

> 灰色の光が細かな雨のように落ちて，絶え間なく透明の網目模様を織りなし，その中で日曜日の散歩者たちは銀色に照らされているようであった。［II, 643］

この描写における色彩は灰色と銀色である。カイエ 53 でも，ステルマリア嬢から「私」に電報が届けられる日，灰色の日の光が細かな雨のように絶え間なく落ちる[21]。こうした暗く重たい色彩は，『ブルターニュ紀行』における風景描写に重なっている。

たとえば，アンボワーズ城の付近の風景描写では，「青みがかってぼんやりとした地平線」に「丘の灰色の境界線」が溶け込み，蛇行するロワール河が銀色に光る[22]。青みがかった色は，ステルマリア嬢の頬の色を連想させよう。

『ブルターニュ紀行』におけるナント城の描写でも，灰色と青の色彩が見られ

る。むき出しの乾いた灰色の壁面の上部にある四角い開口部の格子を通して空の鮮やかな青色が目を引くのである[23)]。さらに，同じ色彩を用いて描かれるのは，カンペール滞在中に，ロク・マリアの小さな修道院を訪れる場面である。この場面で，空は青白く，細かな雨が大気を濡らしながら，降り注ぎ，ヴェールのように灰色の色調でその地を包み込んでいる[24)]。この場面の描写も，上記の『ゲルマントのほう』の場面で，「私」がステルマリア夫人に手紙を届けさせる日の灰色と銀色の色彩で描かれた風景を想わせる。

「私」は，ブーローニュの森にあるレストランでステルマリア夫人と食事をする計画を立て，そのときちょうど「私」のところに立ち寄ったアルベルチーヌに付き添ってもらい，準備のためレストランの下見に出かける［II, 681-683］。カイエ 48 では[25)]，待つことが耐え難く，カンペルレ嬢に会うときのことを考え続けるのを避けるために，嵐の日に「私」はひとりでブーローニュの森に出かけ，夕食をとる部屋を予約し，メニューを選ぶ［II, 1215］。この場面で，ブーローニュの森の木々の下は海底の洞窟のなかに喩えられ，驟雨の音は巨大な岸に打ち寄せる波の音となる。「私」は歩きながら，貝殻のように地面に食い込んでいる落ち葉を踏みしだき，ウニのように棘に覆われた栗を杖で押す［II, 1216］。同様に，『ゲルマントのほう』の最終稿でも，「私」がアルベルチーヌとともに訪れたブーローニュの森は海底に変容する――

> アルベルチーヌは，私が気を取られているのを感じて，ほとんど私に話しかけなかった。私たちは，ほとんど海底にあるような密な樹林でできた緑がかった洞窟の下を歩いた。密な樹林の穹窿の上で風が砕け，雨が跳ねかかるのが聞こえていた。私は地面に落ちている落ち葉を踏み，落ち葉は貝殻のように地面に食い込んでいた。また，ウニのように棘のある栗を杖で押すのだった。［II, 683］

秋の終わり，パリには霧が立ち込め，ブルターニュ地方を想起させた［II, 680］。夜にはブーローニュの森の湖畔にも霧がかかり，白鳥の島はブルターニュの島のように見える。靄のかかったブルターニュの海辺の雰囲気が衣服のようにステルマリア夫人の蒼白い輪郭を包み込む。

このように夫人は，ブーローニュの森にある湖のほとりから連想されるブルターニュの海のイメージに重ねられるのである。他方，ステルマリア嬢の頬はヴィヴォンヌ川の睡蓮のイメージに重ねられていたことを思い返そう［II, 49］。

この人物像が繰り返し水のイメージに結びつけられていることは偶然ではない。『ソドムとゴモラ』では，「私」が再度ステルマリアの名前を耳にする機会があるが［III, 324］，それはブリショが人名の由来を解説する場面で，ステルマリアはブルトン語で水の意味だと説明されるのである。

ブーローニュの森でステルマリア夫人に会うことを期待する「私」にとって，アルベルチーヌはかつてバルベックで出会ったばかりの頃のような恋の対象ではなく，夫人との食事のメニューを決めることを手伝ってもらう相手にすぎなかった［II, 681-682］。カイエ 54 においても[26]，ステルマリア夫人の前身と考えられるシラリア嬢に「私」がブーローニュの森で会いたいと思っていた晩，アルベルチーヌは静かに陽気な様子で，「私」に付き添い，城について解説をしてほしいと言う。このころ「私」はまだアルベルチーヌを愛しておらず，気にかけていたのはシラリア嬢のほうであった。その晩，シラリア嬢からの断りの電報を見て，「私」は悲嘆にくれるが，いっぽうアルベルチーヌは「私」にとって，感じの良い，静かに黙っている友人，連れにすぎないのであった[27]。

『ゲルマントのほう』でステルマリア夫人は，結局「私」と会う約束を断り，ふたりが会うことはない［II, 686］。すでに指摘されているように[28]，ブーローニュの森での夕食会に行く前に，主人公「私」が手紙で相手の女性から会うことができないと冷たく断られ，会えないまま終わるという展開が，『楽しみと日々』における「湖のほとりでの出会い」で描かれている[29]。いっぽう最終稿では，ステルマリア夫人が「私」と会う約束を破ったあと，大恋愛の対象はアルベルチーヌになる。しかし「私」は，状況が異なっていれば，その恋愛はステルマリア夫人に向けられたものになっていたのかもしれないと考える［II, 688］。カイエ 54 でも，「私」はシラリア嬢を愛した可能性もあったと述べる[30]。彼女がブーローニュの森の島に来ていたら，また彼女に会っていたら，アルベルチーヌのことを考えなくなっただろうと考えるのである[31]。

カイエ 54 の別の箇所では，「私」はシラリア嬢と知り合い，彼女を愛し，次いでアルベルチーヌを愛する。のちに「私」はシラリア嬢に会いたいと思うが，それはアルベルチーヌの過去を知るためで，シラリア嬢が女性を愛したことがあるか，そしてアルベルチーヌがそのことを知ることができたかどうか知るためであった[32]。他方，『消え去ったアルベルチーヌ』においては，アルベルチーヌの死後，「私」は，ステルマリア夫人ではなく，アンドレに女性に対する嗜好

やアルベルチーヌとの関係を尋ねる［IV, 128-129］。「私」と会う約束を直前で断ったステルマリア夫人がそののち「私」と会うことはない。

ステルマリア夫人は姿を消すものの，「私」の恋の対象としてアルベルチーヌと夫人は交換可能な相手であったと言えよう。『消え去ったアルベルチーヌ』においても「私」は，夫人が自分とブーローニュの森で夕食をとる約束を違えなければ，アルベルチーヌではなく彼女を愛しても不思議ではなかったと考える［IV, 83/86］。ペノエ嬢を離れる苦しみと忘却に関する考察が，最終稿においてアルベルチーヌに当てはめられるのは，両者が交換可能な登場人物として構想されていたためだと思われる。

結　語

以上，ステルマリア嬢，そしてステルマリア夫人をめぐって，その生成過程を辿ることで，草稿における彼女の前身となる登場人物たちの描写が最終稿でのアルベルチーヌや浜辺の少女たち，ゲルマント公爵夫人の描写と重なっていることを確認した。ステルマリア嬢の頬に浮かぶバラ色は，彼女が海辺の少女たちの一団のひとりとして構想されていた痕跡であると考えられる。しかし最終稿で，ステルマリア嬢の描写から他の登場人物と共通する特徴は消されていることが多い。たとえば，鳥を想わせる鷲鼻やヘビのイメージは，コデラン嬢やゲルマント公爵夫人の描写には用いられるが，最終稿におけるステルマリア嬢の特徴からは消されている。同様に，ゲルマント家の人々の特徴である猫の毛のような髪はカンペルレ嬢の特徴でもあるが，最終的にステルマリア嬢の特徴にはならない。

こうした一連の変更は，この登場人物が何よりも靄のかかったブルターニュの風景のイメージに強く結びついていることを示す。本論では，『ブルターニュ紀行』における登場人物や風景の描写で見られる灰色や蒼白い色，銀色の色彩が，彼女をめぐる色彩として用いられていることを明らかにした。「私」の夢想のなかで彼女は，風景のイメージに結びつけられるのであり，動物の比喩によって描写されることはないのである。

実際，アルベルチーヌと浜辺の少女たちがカモメの一団に喩えられていたのに対して［II, 146］，ステルマリア嬢が鳥に喩えられることはない。また『囚われの女』において［III, 525/585］，「私」の家で暮らすようになったアルベルチー

ヌがペットの犬や猫に喩えられていたのに対し，彼女が犬や猫に喩えられることもない。アルベルチーヌや浜辺の少女たち，そしてゲルマント公爵夫人とは異なり，「私」が離れた場所から見かけただけで，実際に会って話すことがなかったステルマリア嬢は，動きのあるヘビや鳥，猫の比喩を用いて描写されることはないのだ。

さらにステルマリアという名前がブルトン語で水を意味することは，けっして偶然ではあるまい。ステルマリア嬢の頬はブルターニュの海とヴィヴォ―ヌ川のイメージに重ねられ，ステルマリア夫人は，ブーローニュの森の湖とブルターニュの海の水のイメージと結び付けられるからである。

ペノエ嬢から離れたあとで「私」が感じるであろう苦しみと忘却についての考察は，最終稿ではジルベルトやアルベルチーヌに対する恋の苦しみと忘却に関する考察に発展していったと考えられる。また「私」は，ステルマリア夫人と再会していれば，大恋愛の相手はアルベルチーヌではなく，彼女であったのではないかと思い返すことになる［IV, 83/86］。このように両者が交換可能な存在であったことは，ステルマリア嬢の前身となる登場人物のイメージとアルベルチーヌのイメージが交錯する理由のひとつであろう。

最終稿におけるステルマリア嬢，そしてステルマリア夫人をめぐるイメージは，夢想の対象となりながら，謎に包まれたまま「私」の前から姿を消す登場人物を彩る。薄く靄のかかったブルターニュのイメージと結びつけられていた夫人が「私」との約束を断ってきたあと，すでにパリに出ていた霧はさらに深くなる［II, 692-693］。夫人のイメージは，深い霧のなかに消えてしまったかのようである。かくして『失われた時を求めて』の最終稿では，彼女のイメージは靄に包まれたまま消えていくのである。

註

1）『失われた時を求めて』の参照には以下の版をもちい，本文中［ ］内に巻数とページ数を記す（訳はすべて拙訳）―― Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 4 vol., 1987-1989.

2）Voir Mireille NATUREL, *Proust et Flaubert : un secret d'écriture*, Amsterdam / New York : Éd. Rodopi B.V., 2007, p. 57.

3）Voir NATUREL, *op. cit.*, p. 58.
4）Voir Georgette TUPINIER, « Autour de cinq ébauches de Mlle de Stermaria », *Cahiers Marcel Proust*, nouv. série 6, Paris : Gallimard, 1973, p. 215.
5）Voir NATUREL, *op. cit.*, p. 58.
6）Voir TUPINIER, art. cité, pp. 254-255.
7）Voir NATUREL, *op. cit.*, p. 57.
8）Voir TUPINIER, art. cité, p. 211.
9）Voir *ibid.*, p. 225.
10）Voir NATUREL, *op. cit.*, p. 58.
11）Voir *ibid.*, p. 47.
12）Gustave FLAUBERT, Maxime Du CAMP, *Par les champs et par les grèves*, éd. critique par Adrianne J. TOOKE, Genève : Droz, 1987, p. 91.
13）Marcel PROUST, *Jean Santeuil*, précédé de *Les Plaisirs et les jours*, éd. établie par Pierre CLARAC, avec la collaboration d'Yves SANDRE, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, p. 362.
14）Voir TUPINIER, art. cité, pp. 211, 214, 218, 220 et 225.
15）Voir II, 156, 242-245, 258-260. この点については拙論「『失われた時を求めて』における舞台芸術――小劇場の演者――」,『ステラ』第 37 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2018 年 12 月，218 頁を参照されたい。
16）TUPINIER, art. cité, p. 247.
17）Voir *Cahier 26*, transcription diplomatique, note et index par Hidehiko YUZAWA, Nathalie MAURIAC DYER, Françoise LERICHE et Akio WADA, 2 vol., Brepols / BnF, 2010, f° 28 r°.
18）Voir *ibid.*, f° 36 r° ; f° 37 r°.
19）Voir *ibid.*, f° 57 v°.
20）Voir *ibid.*, f° 59 r°.
21）Voir *Cahier 53*, transcription diplomatique, introduction par Nathalie MAURIAC-DYER et Kazuyoshi YOSHIKAWA, notes et index par Nathalie MAURIAC-DYER, Pyra WISE et Kazuyoshi YOSHIKAWA, diagramme et analyse par Nathalie MAURIAC-DYER, 2 vol., Brepols / BnF, 2009, f° 22-22b r°.
22）Gustave FLAUBERT, Maxime Du CAMP, *op. cit.*, p. 106.
23）Voir *ibid.*, p. 188.
24）Voir *ibid.*, pp. 388-389.
25）Voir II, 1211. プレイアッド版によると，Esquisse XXVII の « Promenade au bois de Boulogne » はカイエ 48 からの抜粋である。
26）Voir *Cahier 54*, transcription diplomatique, note et index par Nathalie MAURIAC-DYER, Francine GOUJON et Chizu NAKANO, 2 vol., BnF / Brepols, 2008, f° 63 v°.
27）Voir *ibid.*, f° 63 v° ; f° 64 v°.

28) Voir Enid MARANTZ, « L'infini, l'inachevé et la clôture dans l'écriture proustienne : le cas Mlle de Stermaria », *Études françaises*, Montréal : Les Presses de l'Université de Montréal, 1994, vol. 30, n° 1, pp. 43-44.
29) Voir PROUST, *Jean Santeuil*, *op. cit.*, p. 123.
30) Voir *Cahier 54*, *op. cit.*, f° 26 v°.
31) Voir *ibid.*, f° 57 v°.
32) Voir *ibid.*, f° 29 r°.